

博士課程教育リーディングプログラム 平成27年度プログラム実施状況報告書

| | | | |
|--------|---------------|----------------|-------|
| 採択年度 | 平成23年度 | | |
| 申請大学名 | 慶應義塾大学 | 申請大学長名 | 清家 篤 |
| 申請類型 | オールラウンド型 | プログラム責任者名 | 長谷山 彰 |
| 整理番号 | A03 | プログラムコーディネーター名 | 神成 文彦 |
| プログラム名 | 超成熟社会発展のサイエンス | | |

<プログラム進捗状況概要>

1. プログラムの目的・大学の改革構想

本プログラムは、平成23年度から平成29年度の7年間に亘って、今後日本と世界が直面する超成熟社会を持続的に発展させるという21世紀の人類共通の課題に取り組むリーダーの資質を養成するため、理工学、医科学、政策・社会科学、人文科学に亘って文理融合した、主専攻修士・副専攻修士・博士(MMD)による5年一貫の教育システムを構築することを目的とする。骨太の専門に加え独創的な企画力と高いマネジメント力を持つ博士リーダー人材の輩出を目指す。分野横断的な複合課題へ柔軟に対応できる大学院への組織改革や、21世紀COE、G-COE等26件の拠点形成型プログラムにより、ここ10年間で充実させてきた大学院の高度人材育成プラットフォームを持続的にさらに発展させ、今後の大学院改革のパイロットプログラムとするべく、本プログラムでは文理を横断した大学院研究科と外部産官との教育コンソーシアムが共鳴して博士人材育成とそのキャリア形成を進めるという、従来にない野心的な取り組みを展開する。

2. プログラムの進捗状況

本年度は、プログラム開始から5年目、RA採用から4年目の年度に該当し、とくに1期生が短期留学と社会へ巣立つ準備を本格化する年であった。1期生は全員QEを通過後博士課程に進み、全員が欧米の大学に約6ヶ月の短期留学をし、博士論文の重要な構成要素となる研究成果を上げた。更に12/4のシンポジウムでは、20社から人事採用担当者50名以上を集め、企業における本プログラムの修了生の活用のあり方を議論した。1期生はこのシンポジウムにおいて高い評価を得た。副専攻に進学した2期生は、進路変更をした1名を除いて全員、副専攻の修士号を取得した。3期生は、主専攻の修士論文完成に取り組むとともに、副専攻研究科の科目先取りやゼミ参加を進め、副専攻への入学を許可された。4期生は、この期から新たに早期内定採用を導入した結果、全員で15名を選抜できた。そのうち2名は、3年間で海外大学の修士号を同時に取得するダブルディグリー制度の学生であり、国際連携の拡大に貢献した。4期生は14名が、2～3月に米国のNPO、中小企業等にインターンシップに派遣された。夏・冬キャンプを実施し、チーム活動等に取り組んだ。8月発行の日経ビジネスや11月に発行されたAERA、および12月に出版した「超成熟社会発展のサイエンス」を介して本プログラムの活動を広く広報し、優秀な学生の応募や出口戦略に資する活動に取り組んだ。外部評価は、5月にLERU(欧州研究大学連合)事務総長のKurt Deketelaere氏を招聘して実施し、高い評価を得た。本プログラムは概ね計画どおりに進捗できたものと考えている。